

Journal des dames et des modes

(ジュールナル・デ・ダーム・エ・デ・モード)

Paris : Bureaux du Journal des dames , 1912—1914

Hiler p.486 Colas 1567

1912年6月1日に創刊され、1914年8月1日、第一次世界大戦の開始とともに終わる。日本流にいえば大正元年から3年までの丸2年間だけの発行で、毎月3回、1250部はオランダ紙に、そして29部だけはデラックス版としてジャポン紙(局紙)に銅版印刷され、ポショワールの彩色が施された限定版である。こうして合計79冊からなるこの雑誌には184枚のモード版画が収められ、アナトール・フランスほか多くの詩人らが執筆した。イラストレーターには有名なL.バクスト(Léon Bakst 1866—1924)、G.バルピエ(Georges Barbier 1882—1932)、C.マルタン(Charles Martin 1848—1934)、P.イリーブ(Paul Iribe 1883—1929)、B.B.ドゥ・モンヴェル(Bernard Boutet de Monvel 1881—1949)らがいて本誌の評価を高めている。

もともと、この誌名は、フランス革命によって罷免となった修道院長のピエール・ド・ラ・メザンジュール(Pierre de la Mésangère)がクレマン夫人とともに1797年から1839年まで刊行した同名のモード誌を、その形式とともに踏襲したものであることは、本誌の第1分冊の冒頭に1812年、ラ・メザンジュール刊の扉と図版が複製で掲げられていることによっても知られる。この意味でも、本誌はモードにおけるフランス革命後の新しい復興精神の、20世紀における復活を意図したものとみられる。

では、1910年代に入って、なぜこうした優れた一連のユニークなモード誌が登場するようになったのか。ヴェロネージ女史は、このことについて名著『アール・デコ』の中でのルパープ(Georges Lepape 1887—1971)からの引用をこう述べている。「1909年は転換の年であった。この1年の間にあの“ベル・エポック”はわれわれの“偉大な時代”となったのだ」と。1909年はまたディアギレフ(Sergey Diaghilev 1872—1929)の率いるロシア・バレエ団がパリで初公演を行なった年であり、その後このロシア・バレエは20年間西欧文化の焦点の一つになったのだった。

同じ主旨の見解はハンセン女史にもみられる。すなわち「19世紀のスタイルの混合に対する本格的な反発は第一次世界大戦直前に始まった。……建築家や家具のデザイナーは無駄な装飾や手工芸を模倣することをやめ、基礎の形体に力を入れるようになる。……女性の服装もこの新しい理念の下に変化する。今日の一般に着られている服装が第一次世界大戦に由来するのか、あるいは大戦中に由来するのかをはっきりさせるのはむずかしいが、その後にくるものをほのめかしたにすぎないにしても過去の服装とはっきり縁を切ったのは事実である」と(近藤・原口共訳『服装の歴史』)。一大変革期の到来なのであった。

(石山 彰)

『文化女子大学図書館蔵 西洋服飾ブック・コレクション』より転載



1913年 朝の服装
ドゥ・モンヴェル画



1913年 プリントのリンネルのドレス
G. バルビエ画



1913年 縞柄のリンネルのドレス
C. マルタン画



1913年 散策用のドレス
A. ヴァレ画